

## 幸せの再考

情報工学や脳科学、医療が進歩し、幸せの意味が変わるかもしれない。生産性を高めて得られる余剰の時間で人は何をすべきなのか。個人も企業も「幸せとは何か」と問い直す必要がある。幸せの再考は事業モデル開発から公共政策の設計まで影響を与える。

# どうなれば人間は幸福なのか 古くて新しい問いを考える時

川口盛之助 盛之助 代表取締役

**幸** 福とは何か？この古くて新しい設問に対して、各分野の最新科学を理解した上で挑み直す必要性が増している。公共政策設計からビジネスモデル開発まで含めて、そのインパクトは計り知れない。

**【富裕化と死因の関係】** これから本格化する少子高齢化社会、その実態が日々顕わになりつつある。豊かさを求めて一直線に歩んできたこれまでの軌跡について「富裕化と死因」という角度からグラフを作ってみた。横軸に各国の一人当たりGDPをとり、縦軸にはWHO（世界保健機関）が報告する死亡原因のうち特徴的なものを選び近似線で表記した。

命を脅かす要因が公衆衛生や治安維持という過酷な状況を克服した暁に、トレードオフとして各種の難病が浮かび上がる。平均寿命が延びるに連れて、脅威となる病原はガンなどに絞り込まれ、最後に残る難題は脳神経疾患つまり心の問題という構造が見てとれる。日本の認知症患者数は500万人を突破し、高齢者人口の16パーセントに至る。理想郷を求めて邁進した戦後70年、残った難題はQOL(Quality of life)やウェルビーイングであり、いずれも心の問題と言える。

**【生産性と勤労の関係】** 一方、産業界は一心不乱に生産性向上活動に邁進してきた。日々の改善活動を積み上げ、誇るべき生産性を実現した製造業は我が国に繁栄をもたらしたが、これまでの生産性改善は言葉を変えると省人化活動だった。人工知能（AI）やロボットの進歩によって工程の無人化は更に進められ、行き着く先はベーシックインカムかもしれないとささやかれるようになった。一握りの創造的な人達が莫大な付加価値を生み出せるようになるので、大半の一般市民は再

分配される配当金で生きていけるという理屈には説得力がある。産業の生産性を高めた結果もまた、余剰の時間で人は何をすべきなのかという哲学的命題へと行き着いている。

**【AIと魂の関係】** 肉体労働を奪うロボットも怖い、頭脳業務を担うAIの方は気味が悪い。AIやビッグデータを駆使したレコメンド機能に代表される仕組みはいずれも確率論に基づくアプローチになる。今のAIは、人の行動パターンの因果関係を統計的に分析し尽くしたところ「人間風な反応をするモノができてしまいました」という段階だ。いわば経験則の集大成であり四柱推命や手相占いに近く、その裏に論理はない。論理型でAIを生み出そうとしてきた流れは大きな挫折を味わったわけだが、それだけではなく、「人間自体に魂のような主体があるのではなく実は複雑に反応する装置に過ぎないのかもしれない」という我々自身の定義に関わる疑問を導き出してしまった。

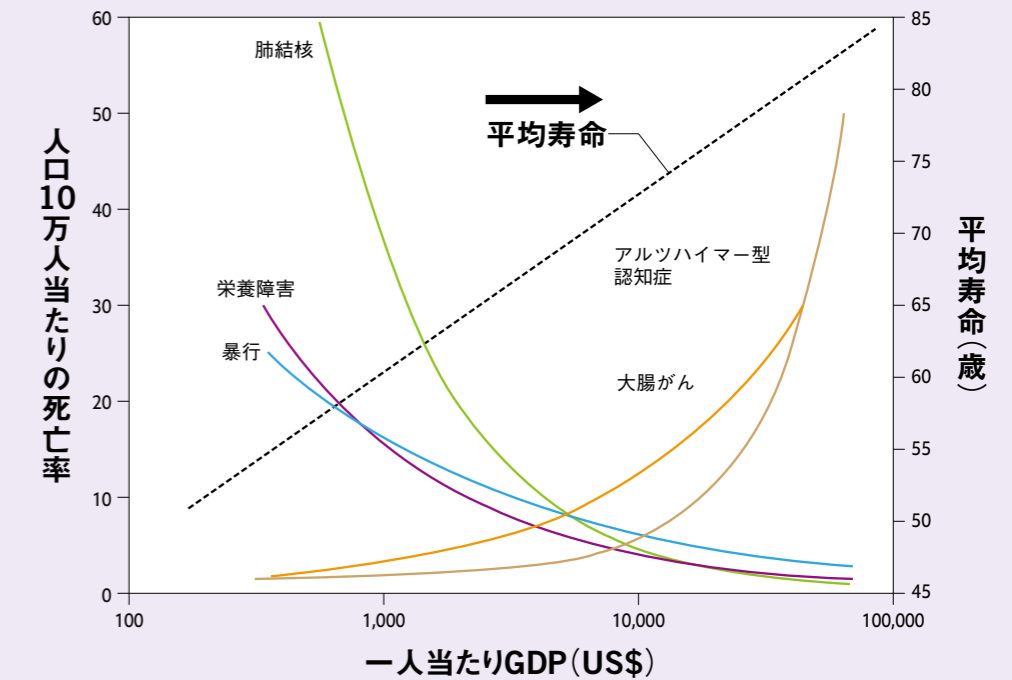
**【人間の幸せ問題】** 裕福な社会を築くことで、伝染病や暴力の恐怖を脱し長寿を手に入れたものの、認知症という脳神経の課題に行き着いた。脳という器官は自分そのものであるだけに悩みは深い。一方で創意工夫を凝らして生産性を高め続けた結果、市民権を持つ者は配当で暮らしを営めるようになるという。民は古代ギリシアのように哲学などを嗜むようになるのだろうか。創意工夫の極みともいえるAIは刻一刻と人間との境界線へ迫りつつある。これらすべての話題は「人の幸せとは何か」という原点問題へと軌を一にしている。

**【脳と幸福の関係】** 成熟化が進む社会の要請に応じる形で、脳と幸福感の関係についても多角的なアプローチ

が進む。マインドフルネスはヨガの呼吸法や瞑想法に近代科学側から解説を加えたものだ。古くからある発酵食品類の活躍する腸内細菌の世界にも光が当たっている。人体を構成する細胞の数より多い100兆個もある腸内細菌類から、幸福感を司るホルモン（セロトニン）が生産されるという。長く共生する微生物が人体の生理だけでなく心理面の役割も担っていることは想像に難くない。腸は第二の脳と言われる所以だ。エレクトロニクスは脳に肉薄している。BMI(Brain-machine Interface)と呼ばれる脳と機械のインターフェース技術の進歩によって、脳の活動状態が可視化され、「心地」や「意欲」などを推測できるようになりつつある。ニューロマーケティングと呼ばれる分野だ。

**【人工物と人の関係】** 第4次産業革命と騒がれるが技術進歩の経緯を紐解くと、人工物が人間へ接近するための苦難の歴史とも言えることが分かる。蒸気機関は紡織工場や軍艦を駆動し、第2次産業革命ではエレベーターと水道ポンプの実用化がビルの立ち並ぶ都市の発達を可能にした。更に進んで、家電品は家事労働を担い、情報通信機器は知的活動をアシストする。技術が洗練されるほどに小型化が進み、デスクトップからモバイル、ウェアラブル型へと進化する。人工物の立場から見ると、それは人間の身体と精神へ肉薄するための長い道のりだったと言える。そしてその最終ステップこそが脳への肉薄なのだ。究極形のAIである「全脳

■富裕化と死因



出所:World Health Organization のデータを基に著者が作成

アーキテクチャ」は脳神経細胞構造をすべて解き明かし、そのまま電子回路で再構築しようというものだ。BMIも心身を司る生体信号との結節を求めて着実に肉薄度を高めている。「幸福」や「人生観」というテーマは長らく哲学や文学など人文科学の守備範囲だったが、裾め手から生理学や情報工学が扉をこじ開けようとしている。

**【幸福大臣の投入】** 新興のサービス産業富裕国と呼べるアラブ首長国連邦（UAE）で2016年、幸福大臣や寛容大臣というポストが新設された。幸福大臣は激変する社会環境の中で、為政者が提供すべき幸福の行く末を見極めようとしている。スイスやフィンランドなど先進成熟国はベーシックインカムの社会実験を進めている。こうした状況下で個人も、企業も、幸せを再考する必要がある。

### 川口盛之助(かわぐちもりのすけ)

1984年、慶應義塾大工学部卒、イリノイ大学修士課程修了(化学専攻)。技術とイノベーションの育成に関するエキスパート。戦略コンサルティングファームのアーサー・D・リトル・ジャパンにおいてアソシエイト・ディレクターを務めたのちに株式会社盛之助を設立。国内のみならずアジア各国の政府機関からの招聘を受け、研究開発戦略や商品開発戦略などのコンサルティングを手がける。著書「メガトレンド」シリーズは独自の的方法論から導き出す精緻で広範な未来予測分析を行い、各界で高い評価を受けている。